

◎佐々木利和氏の講演内容抜粋

このレプリカは国立博物館のレプリカではなく、「腐食がなければ、作られたときはこうだったのだろう」という東京藝術大学金属工芸専門の意見を取り入れたもので、国立博物館にあるものとは相当違います。昔作られた鍬形の姿を想定して復元した唯一のものであります。（中略）

栗山町から出土したうちの一枚のレプリカを作ることによりそれを「核」としてアイヌ文化財の紹介をしました。担当した先生方は「ささやかなものです、狭いところですよ」と話されましたが、「ささやかなものであれ、狭いところであれ」と、アイヌ文化の一面を紹介し得ました。その紹介の「核」として鍬形が使われたことは素晴らしいことであり、これからのアイヌ文化の保存の在り方を先取りした方法だと思えます。もっと早い機会に、栗山町の皆さんに紹介できなかったことを申し訳なく思っています。

私にはお願いがあります。鍬形を「核」として、栗山町を中心としたアイヌ文化の地名、かつてのコタンの所在地、そこでの生活、和人入植以前の植生、川の流れ、アイヌの人々の交通路、船着き場の位置などの調査復元、また、栗山町には非常に大きなアイヌ文化が残っており、その痕跡も各地にあるので、栗山町発のアイヌ文化研究の場を作っていたきたいです。

最後に、やはり早い機会に「四枚の鍬形の里帰り」を考えなければならぬと思います。「四枚の鍬形」がかつて眠っていた地に戻るができるならば、鍬形にとっても喜ぶべきことだと思うのです。



◎出土した「アイヌ鍬形」

栗山町のロマンあふれる物語 昔々（※注①）、優秀なアイヌの長が、栗山町のあるところに集まり、相談事をしていました。その時、長が所持していた鍬形をこの地に埋めていきました（※注②）。

それから数百年後の大正五年、角田村桜山で開墾していた尾田氏ら三人が七枚の不思議な形をしたものを地中五、六寸ほどのところで見つけました。

当時、日本全国の土地から出土したものは天皇の財産として確保していたため、宮内省からすべてを差し出すようにとの通達がありました。そして、四枚の状態の良いものは帝室博物館に留め置き、三枚は戻されました。

※注①・西暦一七〇〇年～一八〇〇年

※注②・アイヌ鍬形は、病魔や悪神を追い払う最も重要な祈禱具で、祟りを恐れ、土中に埋めて保存する習慣がありました。そのため、埋めた人以外の誰もその場所を知らないで、そのままになっている例が沢山あります。アイヌの優秀な長Ⅱ首長だけに所持が許されていた「アイヌ鍬形」が桜山の未開地から七枚出土しました。この地に北海道中のアイヌの長が集まったことを物語っています。

開拓記念館特別展のお知らせ



◎名所絵葉書で巡る日本の旅

当館所蔵資料にある観光絵葉書の中から、観光地風景と観光対象となった国内の歴史、自然、風土など、現在の観光概念との変化を眺めることができます。

・期 間 七月十五日まで

◎空撮映像展

「栗山の歴史を空から眺める」

・期 間

八月五日から九月十八日まで

資料の寄贈について

町開拓記念館では資料を収集しています。家の建て直しや整理などで意外なお宝が出てくる可能性があります。古く珍しいもの、栗山町にゆかりのある物などがあろうだと思ったらご連絡ください。

資料としての保存の可否については、当館にお任せいただくことになります。

四月に鯉幟一式を角田の泉陽子さんと由仁町の東朋美さんから、五月には日章旗、軍隊手帳を中央四丁目の丸山紘司さんから、角樽、三々九度盃、郵便番号表を角田の藤田泰治さんからそれぞれ寄贈していただきました。



寄贈していただいた三々九度盃

栗山の知恵袋 横田直成さんの足跡



平成十年から平成十四年まで栗山町史編纂員、平成十六年から文化財保護委員、栗山歴史を学ぶ会、くりやまエコマネー

研究員、ハサンベツ里山計画実行委員、町民講座「なるほど栗山学」講師、アイヌ鍬形の調査、文献執筆（町教育委員会でもとめた「アイヌ鍬形」の監修）など、様々な面で活躍しました。

横田直成さんは何事にも努力を惜しまぬ方でした。事情があり五年前に栗山町を離れましたが、その後体調を崩し、一年半の闘病の末、今年四月十三日に亡くなりました（満八九歳）。

葬儀は家族だけで行い、「皆さまへのご挨拶はその後するように」と遺言を残し、直筆の「宛名書き」と挨拶文も残していました。ご冥福をお祈りします。

栗山町開拓記念館 研究員 坂口 昇一
栗山町教育委員会 発行

報 廣 アノ口

令和4年7月1日
第 107 号
栗山町開拓記念館

○栗山町のお宝発見

- ・ナウマン象の臼歯 一九六一年（昭和三十六年）
- ・アイヌ鋏形 一九十六年（大正五年）

今回は「栗山のお宝発見」と題し、過去の大発見をクロージアアップしてみます。

まず「ナウマン象の臼歯」は、後記するように生息していた場所にかかわる大発見であるということです。

また、大正五年に発見され東京国立博物館で展示されていた「アイヌ鋏形」が、栗山町にレプリカで再現され、大きなニュースになりました。これら二つの大発見についてお知らせします。

●ナウマン象の歯 いつ、どうして？

昭和三十六年七月、栗山町字円山の内城守雄氏が水田工事中、ブルドーザーで切り崩していた段丘堆積物の中から一つの化石を発見、採集しました。その後、この化石は種類名不明のまま特殊な化石として、地域の教材用に円山小中学校へ寄贈されました。

昭和三十八年六月に野村崇氏（当時夕張鹿島高校教諭）らが、栗山地方の遺跡調査の折、この化石を見て写真に撮り、湊正雄博士（北海道大学理学部）のもとに送ったところ、同学部の松井助教授から「旧象の歯」と考えられる旨の返信があり、詳細については同学部で実物の研究をする伝えられました。

翌月、野村崇氏と矢野牧夫氏（夕張市千代田中教諭）は、この化石は「マンモス象」との想定から化石を借り受けるとともに、出土地点および出土地層の確認を行いました。

さらに矢野氏は、この化石の実物大写真を井尻正二氏（東京経済

大学）、亀井節夫氏（京都大学助教授）に送付したところ、「ナウマン象の左上顎第二大臼歯」と鑑定されたのです。

また、学習院大学で化石林の木片を使い放射性炭素による絶対年代を測定した結果、約三万年前のものであることが裏付けられました。

四六億年前／地球誕生

～二万年前
ナウマン象生息

一七〇〇年～一八〇〇年頃
この頃にアイヌ鋏形を埋めた？

一八五七年・松浦武四郎
アノロ川をスケッチ

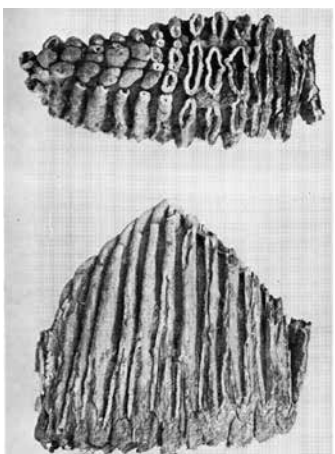
一八八八年・泉麟太郎入植
夕張川を渡り角田とする

一九十六年栗山町桜山でアイヌ鋏形発見
泉村長↓帝国博物館（現国立博物館）へ
ナウマン象の臼歯発見

二〇〇一年
アイヌ鋏形レプリカ完成
協力 国立博物館

二〇〇二年・七月
ナウマン象臼歯レプリカ完成

二〇二二年 今年



ナウマン象の臼歯レプリカ
（左上顎第二大臼歯）

◎ナウマン象発見の意義

円山で発見されたナウマン象の化石が北海道で初めての出土であったということは、学術上明記される事実です。また、ナウマン象の生息北限が本州青森県から北海道に移ったこと、泳げないナウマン象の北海道渡来により、津軽海峡の生成説明Ⅱ陸続きの手掛かりとなること、マンモス象（北方系）とナウマン象（南方系）が共存した地点として、その時代の気象、風土究明の手掛かり（示相化石としての意義）となることなど、地質学的、考古学的に、また生物学的にも貴重な一石を投じ、それが第四期の地史に及ぼす影響も大きいものがあります。

また、町開拓記念館が建てられてから十数年経過した平成十四年七月にナウマン象臼歯のレプリカ、七分の一のナウマン象の模型を町教育委員会が購入し、当館で展示しています。

●アイヌ鋏形のレプリカ紹介

平成十一年、栗山町の坂根功章氏は、東京国立博物館を訪ねた時に偶然アイヌ鋏形を観覧し、それが栗山町字桜山出土ということを知ります。

当時の北海タイムスによると、大正五年に桜山で七点発見したとあります。泉麟太郎村長は北海道へ届け、帝室博物館（現国立博物館）へ送ることになりました。四枚は博物館で留め置き、三枚は返却されました。

オオムラサキの会を中心として調査が始まり、栗山町へレプリカの作成をお願いしました。その後、平成十三年六月に念願が叶い、同月三十日に国立博物館の佐々木利和氏を講師に「アイヌ鋏形」についての講演が行われました。アイヌ鋏形の調査を行っていた横田直成氏はその講演録音を活字に記録しました。その一端をご紹介します。

（裏面へ続く）